

高松 龍 (東京大学大学院)

rwaiu@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

概要

本稿は、ENSURE の意味で用いられる *make sure* の下位範疇化 [+__to VP] (e.g. *Make sure to come before six*) について考察する。本稿は以下の二点を目的とする。第一に、これまでの語法・文法研究や辞書等の記述において、管見の限りあまり注意が払われて来なかった *make sure to VP* に関する言語事実を記述することである。第二に、動的文法理論 (Kajita 1977, 1997) の枠組みにおいて、問題の [+__to VP] が、言語習得のある段階において習得済みの他の下位範疇化素性 (*make sure*: [+__that S], *sure*: [+__that S], [+__to VP]) に動機付けられ習得されると主張し、ある法則に従って下位範疇化素性が段階的に拡張するという見方が、経験的・理論的に支持されることを示すことである。具体的には、*be sure to VP* と *make sure to VP* が統語的な制約を共有する等の経験的事実と、下位範疇化素性の動的な拡張という見方がこれまでも指摘されており、動的な見方では「可能な」素性獲得の道筋をより狭められるという理論的利点が示される。

1. はじめに

英語の *make sure* は、基本的に ENSURE と FIND OUT という 2 つの意味を持つ。本稿では、以下 (1) に示されるような、前者の意味の用法を持つ下位範疇化素性 [+__to VP] について考察する。

- (1) a. Practically any pasta that cooks in 10 minutes or less works, but make sure to use the correct ratio of pasta to water. (The New York Times, Apr. 20, 2020)
- b. In the immediate aftermath of the disaster, Kishida made sure to keep an open channel with the media, answering questions from reporters on a daily basis. (The Japan Times, Jan. 11, 2024)

以下、2 節において *make sure to VP* に関する基本的な事実観察を行う。3 節では、Chomsky 流のアプローチをとった場合に生ずる経験的・理論的な問題点を指摘する。4 節では、動的文法理論 (Kajita 1977, 1997) の枠組みで代案を提示する。そのうえで、語彙毎の下位範疇化素性がある法則に従って段階的に拡張するという見方が、経験的・理論的に支持されることを示す。

なお、生成文法理論における下位範疇化 (または c-selection) の扱いについては様々な議論があるが (e.g. Grimshaw 1979, 1981; Pesetsky 1982: 180–205; Chomsky 1986: 86–90; Svenonius 1994, 2017; cf. Chomsky 1995: 26–29), (2) に示すような経験的事実から、本稿では下位範疇化に関する情報は Chomsky (1995) 以降の枠組みでの formal features (FF) として、[+__DP], [+__that S] などと語彙毎

* 本研究の遂行にあたり、小田博宗先生、鈴木猛先生、坪井栄治郎先生、三浦あゆみ先生、渡辺良彦先生に様々な段階で貴重なご助言をいただいた。ここに記して謝意を表す。また、インフォーマントとして例文判断にご協力いただいた Wyatt Davis さん、Gen Kazama さん、John Lewis 先生の 3 名にも心より感謝申し上げる。無論、本稿に残る不備はすべて筆者の責任によるものである。

に指定されるという立場をとる。

- (2) a. The lamb ate (the lion).
b. The lamb devoured *(the lion). (Jackendoff 2002: 133)

2. 基本的事実

ENSURE の意味の *make sure* は [+__PP] (3a), [+__that S] (3b) に加え, (1) に挙げたような [+__to VP] の下位範疇化素性も持つが, この点は限られた辞書にしか記述が無い¹。

- (3) a. A: Show up early to have a seat.
B: I wanted to make sure of that.
b. Make sure you come before six.

筆者の知る限り, 唯一具体的な記述をしているのは『ジーニアス英和辞典 第6版』で, “*make sure to do* は *be sure to do* との混合から生じた表現”(s.v. *make sure*) とあるが, 証拠は挙げられていない。

次に, *make sure to VP* における興味深い統語的制約を観察する。例えば *make sure (that) S* では主節と補文の主語が異なっても良いが (4), *make sure to VP* では *to* 不定詞補文の主語が顕在化することではなく, 常に主語と同一指示であると解釈される (5)²。

- (4) a. ^{OK/OK/OK}Make sure you come before six.
b. ^{OK/OK/OK}Make sure John comes before six.
(5) a. ^{OK/OK/OK}Make sure PRO to come before six.
b. ^{*/?/?/*}Make sure for John to come before six.

また, 同じ *make sure* でも FIND OUT の意味では, 下位範疇化素性は [+__#] (6a), [+__PP] (6b), [+__wh- S] (7a), [+__that S] (7b), [+__wh to VP] (8a) のみであり, [+__to VP] (8b) は不可である。

- (6) a. ^{OK/OK/OK}I think I locked the back door, but let me go make sure.
b. ^{OK/OK/OK}John made sure of the facts before writing the paper.
(7) a. ^{OK/?/OK}I just want to make sure when I should pay the fee.
b. ^{OK/OK/OK}John called the office to make sure he was eligible for rehire.
(8) a. ^{OK/?/OK}I just want to make sure when to pay the fee.
b. ^{*/?/*/*} John called the office to make sure to be eligible for rehire.

以上の事実, つまり (5b) の主語の顕在化に関する制約がどこからやって来たのか, また同じ *make sure* でもなぜ ENSURE の意味でのみ [+__to VP] が可能なのかについて, 筆者の知る限り, 現状では原理的な説明が与えられていない。

¹ (3a) は本稿インフォーマント 1 名による作例であるが, 残る 2 名は ENSURE の意味の *make sure* において *make sure of DP* つまり [+__PP] を認めなかった。詳細は不明だが, 何らかの事情によりこの素性が獲得されない可能性があるものと思われる。

² 以後, 例文の前に付す記号はそれぞれインフォーマントの話者 A, B, C の容認性判断を表す。

3. Chomsky 流の分析における問題点

Chomsky (1995) 以降の極小主義では、下位範疇化素性を含め、FF の段階的な獲得という見方自体は否定されない。しかし、下位範疇化の情報が語彙毎に指定されるという立場をとると、言語習得の過程において、ある語の下位範疇化素性がどのように獲得されるか (例えば、ENSURE の意味の *make sure* で [+__PP], [+__that S], [+__to VP] が一度に獲得されるのか、もしくは段階的に獲得されるのか、後者であればどのような法則によるものか等) が問題となる (cf. Grimshaw 1979, 1981; Pesetsky 1982; Chomsky 1986)。段階的な習得を考えた場合、例えば [+__that S] → [+__to VP] という段階的な獲得を論証するにあたり、なぜその逆ではないのかという点については、偶然の産物と考えるほかになく、極めて反証可能性に乏しい。言い換えれば、「可能な」素性獲得の道筋を狭めることが極めて難しい。また、(5b) で触れた補文主語の顕在化に関する制約が、どこからやって来たのかを説明することも難しい。

4. 代案

4.1. 動的文法理論

前節で指摘した Chomsky 流の分析における問題点を、動的文法理論 (Kajita 1977, 1997) の枠組みで解決することを試みる。Chomsky (1975, 1986, etc.) の瞬時的言語習得モデルでは、「可能な文法」は UG の属性 (加えて、言語固有でない要因) によって規定される。ここで、この瞬時的習得という考え方は単なる単純化ではないことに注意されたい。これには、PLD が提示される順序や時期の相違などが、言語習得の結果 (獲得される安定状態) に実質的な差異を生じさせるという事態は生じない (Chomsky 1975: 119–122) ため、時間軸の概念を捨象して構わないという経験的な主張が込められている。

一方、Kajita (1977, 1997) の非瞬時的言語習得モデルでは時間軸と、これに沿った文法の段階的な発達が考慮される。よって、(9) に示されるように UG の特性だけでなく、それまでの言語習得の段階で既に獲得された文法にも基づいて、「可能な文法」が規定される。

- (9) If $G(L,i)$ has property P , then $G(L,i+1)$ may, though need not, have property P' , and if $G(L,i)$ does not have P , then $G(L,i+1)$ cannot have P' unless some other constraint in the system makes P' possible in $G(L,i+1)$. [$G(L,i)$: the grammar of a language L at stage i ; $G(L,i+1)$: the grammar of the language at the next stage] (Kajita 1997: 384)

この原理が具現化される条件の 1 つに、paradigmatic gap がある (Kajita 1983)。ある言語習得の段階 i の文法 G_i において、要素 (素性、語彙項目、構文等) A_1, A_2, \dots, A_n と B_1, B_2, \dots, B_{n-1} が習得されており、ここで話者が、 $(A_1, B_1), (A_2, B_2), \dots, (A_{n-1}, B_{n-1})$ の組が自然なパラダイムを形成することに無意識に気づくと仮定する。しかし、 G_i では A_n に対応する B の要素が習得されておらず、パラダイムに gap が生じている。この paradigmatic gap を解消するため、 G_{i+1} において既に習得されている

(A₁, B₁), (A₂, B₂), ... (A_{n-1}, B_{n-1}) の組をモデルにして, B_nの習得が動機付けられる (cf. 河野 1984; 鈴木 1985a, b; 渡辺 1989a, b)。

4.2. 動的なアプローチ

動的文法理論の枠組みで, 浅川 (1987) は下位範疇化素性の拡張原理として (10) を提唱している。

- (10) Extension of Strict Subcategorization Feature: a new strict subcategorization feature is introduced into the lexicon on the basis of the semantic or structural similarity between the basic and the model structure. (浅川 1987: 286)

以下, 2つの要因が動機づけとなり, 問題の [+__to VP] が (10) に従って習得されると主張する。第一の要因は, paradigmatic gap である。英語のある習得段階 *i* の文法 G_{*i*}において, ENSURE を意味する *make sure* では [+__PP] と [+__that S] が習得されており, *sure* では, (11) に示すような [+__that S] と [+__to VP] が習得されていると仮定する。ここで, 命令文では *be sure* が *make sure* と意味的に類似することに注意されたい。

- (11) a. Be sure you come before six.
b. Be sure to come before six.

ここで, 意味機能の類似から ENSURE の *make sure* と *sure* との間に, 下位範疇化に関するパラダイムが形成される。しかし, G_{*i*}では *make sure* の [+__to VP] が習得されておらず, (12) に示すように paradigmatic gap が存在している。

- (12) Paradigmatic Gap in G_{*i*}

<i>Sure</i>	<i>Make Sure</i>
[+__that S]	[+__that S]
[+__to VP]	

このギャップを埋める力が働き, 次の習得段階の文法 G_{*i+1*}で, *sure* の [+__that S] と [+__to VP] を 1組のモデルとして, *make sure* において [+__to VP] の習得が動機付けられ, *make sure to VP* が可能になると考えられる。

第二の要因として, 表現力拡充が考えられる。*be sure to VP* は ENSURE の意味では基本的に命令文でしか使うことができない。例えば, *John was sure to come before six* は (11b) と異なり, *make sure* の意味を表さない³。形容詞は state を表すのがプロトタイプ的であり (Lakoff 1987: 491ff.), *sure* は命令文の *be sure to VP/that S* でこそ action を表すが, 恐らくは (CERTAIN という) state の意味が優勢

³ インフォーマント 3名のうち, 1名は *John was sure to come before six* と *John made sure to come before six* の間に意味の差を認めない。本稿の提案通り, *sure* の [+__to VP] が先に習得されるとすれば, この話者では *make sure* では [+__to VP] が習得されなくても良いはずである。この点は今後の課題とする。

である。よって、命令文以外の文脈でも使用可能で、action (ENSURE) の意味を表すような *to* VP を用いた表現が G_i には存在しない (action を表す *make sure that S* は既に可能であることに注意)。この状況が、*sure to* VP で表現するには制約の多い action の意味を、*make sure* という既に習得している表現で顕在化させる動機づけになり、 G_{i+1} において *make sure to* VP が可能になると考えられる。

このように、paradigmatic gap と表現力拡充という 2 つの力が *make sure to* VP の習得を動機付ける方向に作用することで、 G_{i+1} において *make sure* の下位範疇化素性が拡張され、[+__to VP] が習得される。文法拡張の累加的な性質 (Kajita 1997: 385) を考慮すると、同じ方向に作用する動機づけが多ければ多いほど、それだけ拡張の蓋然性が高まると予測される。

4.3. 帰結

本稿の分析が、2 節で観察した事実をどのように説明するかを見る。拡張分析では、モデルである (*be*) *sure to* VP の性質が、派生体の *make sure to* VP に受け継がれるという発想も何ら不自然ではない。実際に、(13) の *be sure to* VP では、(14) の *make sure to* VP において観察されたように、*to* 不定詞補文の主語が顕在的に現れない。

- (13) a. ^{OK/OK/OK}Be sure you come before six.
 b. ^{OK/OK/OK}Be sure John comes before six.
- (14) a. ^{OK/OK/OK}Be sure PRO to come before six.
 b. ^{*/?/?/?}Be sure for John to come before six.
- (15) a. ^{OK/OK/OK}Make sure PRO to come before six.
 b. ^{*/?/?/?}*Make sure for John to come before six.

これは、*to* VP の顕在的主語に関する制約が *sure* から *make sure* にも受け継がれたものと思われる。ただし、この性質が *sure* またはその [+__to VP] が持つものか、*be sure to* VP という構文自体が持つものかは現時点では定かでない。

また、FIND OUT の意味の *make sure* は *be sure* と意味的に重ならず、paradigmatic gap 等 [+__to VP] の習得を動機付ける要因が存在せず、その下位範疇化素性は [+__#], [+__PP], [+__wh- S], [+__that S], [+__wh to VP] のみで、[+__to VP] が不可であることが自然に説明される (cf. (6)–(8))。

さらに、各構文の史的発達に関するデータも本稿の提案の傍証となる。The Oxford English Dictionary (OED) によれば、*make sure to* VP の初出は 1603 年 (16) である。

- (16) 1603 They made sure to have a Devil readie at a trice.

(S. Harsnett, *Declaration of Popish Impostures* 59; OED, s.v. *sure*, P.6.a.i.)

しかし、The Corpus of Historical American English (COHA) では初出が 1869 年 (17) で、これを含め 19 世紀の例は 4 件しかない。20 世紀ではこれが 136 件に、21 世紀では 318 件に増加する。

- (17) ..., she at least has made sure to furnish the pick, and to have a claim on the gold it brings to light.
 (COHA 1869: MAG)

また、COHA の検索結果によると *make sure to VP* は *be sure that S/to VP*, *make sure that S* よりも遅れて出現する⁴。図 1 は各構文について、同コーパスにおける百万語当たりの出現頻度を示したものである。よって、本提案には共時的・通時的な経験的裏付けがある。

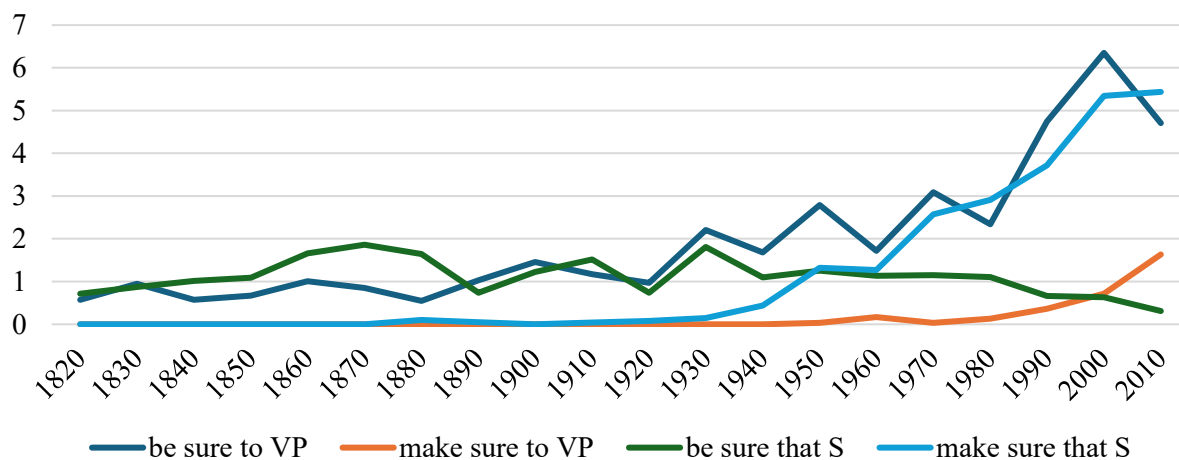


図 1 COHA における *be sure that S/to VP* および *make sure that S/to VP*

最後に、ある法則に基づく下位範疇化素性の動的な拡張という提案は浅川 (1986, 1987) や渡辺 (1989a, b; 1995) が既に行っており、本稿の提案は決して *ad hoc* なものではない。動的文法理論では意味的類似性 (e.g. *prove AP* → *prove to VP* では V が一部の状態動詞のみ可能 (浅川 1986: 65)) や、gap の原則 (Kajita 1983) など拡張の法則が考慮され、3 節の Chomsky 流のアプローチに比べ「可能な」素性獲得の道筋をより狭められるという理論的利点がある。

5. 結語

本稿は、ENSURE の意味で用いられる *make sure* の下位範疇化素性 [+*_to VP*] に焦点を当て、まず事実観察を行った。続いて、Chomsky 流のアプローチでは「可能な」素性獲得の道筋を説明することが難しく、動的な文法の拡張により、ある法則に基づいて素性が段階的に習得されるという見方が経験的・理論的に支持されることを見た。今後、様々な言語における事例研究を積み重ねることで、各言語に普遍的な拡張の法則 (cf. 渡辺 1995: 98) や、個々の範疇において獲得済みの素性の拡張が繰り返されるのではなく、複数の範疇が一度にある素性を獲得するような拡張 (cf. Roberts (2021) の Input Generalization) が存在する可能性などが明らかになるとと思われる。また、拡張の法則を文法外のいわゆる第三要因とみなす可能性についても検討すべきである。

引用文献

浅川照夫. 1986. 「動詞の補部: 基本から特殊へ」『英語教育』35, 64–66.

⁴ 検索式はそれぞれ *be sure (that) you*, *be sure to _v?i*, *make sure (that) you*, *make sure to _v?i* である。条件を揃えるため命令文の用例のみを筆者が抽出し、目視で確認し無関係な例を排除した。

- 浅川照夫. 1987. 「厳密下位範疇化素性の拡張—述詞の分布と有標性—」『言語習得理論にもとづく英文法総合研究』研究代表者, 梶田優. 東京学芸大学, 286–295.
- Chomsky, N. 1975. *Reflections on Language*. New York: Pantheon Books.
- Chomsky, N. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger Publishers.
- Chomsky, N. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Grimshaw, J. 1979. “Complement Selection and the Lexicon.” *Linguistic Inquiry* 10, 279–326.
- Grimshaw, J. 1981. “Form, Function, and the Language Acquisition Device.” In C. L. Baker and J. McCarthy, eds., *The Logical Problem of Language Acquisition*, 165–182. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, R. 2002. *Foundations of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Kajita, M. 1977. “Towards a Dynamic Model of Syntax.” *Studies in English Linguistics* 5, 44–76.
- Kajita, M. 1983. “Grammatical Theory and Language Acquisition.” Paper presented at the 1st Annual Conference of the English Linguistics Society of Japan.
- Kajita, M. 1997. “Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language.” In M. Ukaji, T. Nakao, M. Kajita and S. Chiba, eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 378–393. Tokyo: Taishukan.
- 河野継代. 1984. 「英語の ‘Pretty’ 構文について」『言語』13, 108–116.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Pesetsky, D. 1982. *Paths and Categories*. Doctoral dissertation, MIT.
- Roberts, I. 2021. *Diachronic Syntax*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Svenonius, P. 1994. “C-Selection as Feature-Checking.” *Studia Linguistica* 48, 133–155.
- Svenonius, P. 2017. “Syntactic Features.” In M. Aronoff, ed., *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- 鈴木猛. 1985a. 「前置詞としての out(1)」『英語教育』34, 68–70.
- 鈴木猛. 1985b. 「前置詞としての out(2)」『英語教育』34, 70–72.
- 渡辺良彦. 1989a. 「文脈素性の拡張: 発話様態動詞の場合(1)」『英語教育』38, 73–75.
- 渡辺良彦. 1989b. 「文脈素性の拡張: 発話様態動詞の場合(2)」『英語教育』38, 65–67.
- 渡辺良彦. 1995. 「形容詞補部の派生的性質について: 文法の「中核部」と動的文法理論の可能性」『言語文化研究』14, 95–112.

コーパス

The Corpus of Historical American English (COHA), Available at <https://corpus.byu.edu/coha/>.

辞書

『ジーニアス英和辞典 第6版』東京: 大修館書店.

The Oxford English Dictionary, Online ed. (OED), Oxford: Oxford University Press, Available at <https://www.oed.com/>.